

(千葉県) 19BOX

[アンドー塾 / Z会学習教室 / mana]

本当の自分はどこだ。
塾との出会い、師との出会い……演じ続けて来た自分に別れを告げ、
ついに手にした「自分ブランド」。
想いのたけを詰めた「箱」の蓋はいま、開かれた。

取材・文 / 松見敬彦(トリガーワークス)

「空っぽ」の優等生

少年・安藤賢孝は、明らかに「完璧」だった。勉強は常にトップクラス、クラブではキャプテン、さらに生徒会役員も務める。スポーツも得意、ピアノだって弾けたし、先生受けも抜群にいい。「オレ以上のヤツなんていない」、自分でもそう思うほど。

しかし華やかな称賛の裏で、その秀才の心は虚しいまでに空洞だった。いつだって自信满满、マジメで何でもでき、人望も厚い優等生。いつしかそんな、周囲の視線に応えた自分を演じるようになっていたのだ。しかし、それを崩してしまえば自分は一気に孤立するのではないか。そんな不安に苛まれるようになる。「本当の自分」を出したい。いや、本当の自分って何だ？ そもそもオレには本当の自分なんてものがない……実はその孤独感へのアンチテーゼこそが、安藤の塾作りの原点だ。

自分の生きた証を残すために

その後は「とりあえず」国立大を卒業し、大手電機メーカーに「なん

ういう塾じゃないんです」と言い切る。広告でも合格実績を謳うことはない。

また、元々が聡明なアイデアマンだけに、塾や勉強を楽しむためのフックも多数仕掛けた。例えば、目的ある勉強意識の育成戦略「夢力ナストラテジー」。テスト対策の「天下一勉強会」。部活を引退した三年生は「アンドー部」に入って、「自

となく」就職。その頃になっても、空っぽの心は埋まらないままだったのだ。それでも三年働いてみたが、やはり何か足りない……。そんな気持ちを抑え込め、週末に塾で生徒指導の手伝いを始めた。

いつも虚無感を抱いていた安藤だったが、塾講師は「楽しい」と感じた。生徒に過去の自分を重ねたのか、彼らの主体的な人生創りに関与できることに喜びを見出せたのだ。やがて、次第に塾の仕事にのめり込むようになる。

しかし、そうさせたのにはもうひとつ理由がある。塾の上司の存在だ。彼は「自分」をハッキリと持つ強い男で、安藤も素直に憧れた。彼もまた「ビジネスとは「社会人とは「生

「19BOX」。すべての想いをその箱に込めて

「こうあるべき」——そんな息苦しさの中で生きてきた安藤だけに、塾に對してもその思いは強く抱いていた。「塾は中身で勝負」、それは分かる。しかし、成績を上げるだけでいいのか？ 既成概念に捉われず、もっともっと付加価値があつて



「19 BOX」のノベルティ。クールなデザインでマグからスマホカバーまで揃う



アンドー塾おゆみ野校。ここを含むすべての教室を包括する総合ブランドが「19 BOX」だ

主トレ」「練習試合」と称した勉強会に取り組む……etc。
極めつけは先ごろ設立した、アンドー塾を含む自塾ブランドを包括する上位概念、総合ブランドの「19 BOX (ジュークボックス)」。自分の人生は自分で創る「自分ブランドをデザインする」という考えのもと、あらゆる生徒の個性や夢に対応するための「塾の箱」だ。

そこまでブランドという概念にこだわるのは、「自分」を渴望し続けてきた安藤だからこそ。そして今、彼はついに見つけたのだ。塾を通じて自分を表現する術を。自分の「ブランド」を。
19BOX——それは、本当の自分、教育への想い、ビジネスへの口マン、安藤のあらゆる想いが詰め込まれた夢の「箱」なのだ。(敬称略)

代表 安藤 賢孝 さん

探し求めた

「自分ブランド」をいじの手に



安藤 賢孝 ANDO Masataka

1979年、千葉県生まれ。開業7年目、5教場(今夏、六教場目を開校)約500名の生徒を抱える。幼少期より「本当の自分」を出せないまま優等生を演じ続けた過去を持つことから、既成概念に捉われない塾運営を展開。アパレルを思わせるクールでシャープなイメージ戦略もそのひとつ。また、そういった新しいチャレンジを共に行える仲間を探すべく、コンサル事業にも着手している。

●WEBサイト <http://19box-web.com>

●ブログ「恋愛と同じですよ!」 <http://ameblo.jp/andojuku/>